

命をはぐくむ飼育活動

「先生、コッコが卵を産む瞬間を見たよ。」「産みだての卵って温かいんだね。触ったらほかほかしたよ。」「うん、それに少しぬるつとしてたよ。鳥の羽も付いてた。」

当番の仕事を終えて飼育小屋から帰ってきた子どもたちが、興奮気味に話してくれました。

毎年四年生が飼育の活動を行うことになっていますが、今年、鳥インフルエンザの影響で引き継ぎだけはしたものの、実

際の活動はできませんでした。六月になってやっと飼育当番の活動が始まって間もなくの出来事でした。



「ぼくが卵をもらって帰って、目玉焼きにしたよ。黄身はぶりぶりですごくおいしかった。コッコに感謝しながら、食べたよ。」

下羽栗小学校には、鶏が一羽とウサギが三羽います。代々四年生が命を預かり、名前を付けて大切に育ててきました。ウサギの餌にする青菜を家から持つ

てきたり、飼育小屋の掃除や水換えなど一生懸命世話をしています。



子どもたちに聞くと、飼育小屋の扉を開けるとウサギが鼻をひくひくさせながら寄って来てくれる時が一番うれしいそうです。このところの気掛かりは、鶏のコッコがちよつと元気がないことです。

飼育活動を通して、命の不思議さや素晴らしさに触れてほしいと思います。そして、生き物ばかりでなく、仲間に優しく接したり、命を大切にしたりできる子に育ってほしいと願っています。

下羽栗小学校

教諭 山田敬子

教育委員会
だより

「3分の2、3分の1」 食育の勧め

「3分の2」、「3分の1」。何の数字とも思いますか。これは、平成9年の国民栄養調査の結果の一部です。それによると、

*「朝食欠食者」 20歳代男子の朝食欠食は、20・4%。そのうち、3分の2は、高校卒業ころまでに習慣化している。

*「孤食」(子どもだけで食事をとる) 昭和57年には22%だったが、平成5年には32%に増加(約3分の1)

更に、平均体重より120%以上の肥満傾向の子どもは、昭和52年は6・7%だったが平成14年には11・7%の増加。

この結果は、「家族揃って食事を取ることが少ない朝食を食べないことが習慣化して大人になっていく。肥満の傾向が進む」といった子どもたちの生活が見えてきます。また、外食や調理済み食品を取ることが増

えると共に、痩身願望や体力低下が進んでいると言います。このままいくと30・40年後には、健康を害した大人や高齢者が社会にあ触れてしまいます。

食事は、すべての健康のもとです。また、一緒に食事をすることは、家族の触れ合いとなり心の栄養にもなります。

学校では、授業で食に関する基礎知識を教えたり、自己管理の力を育てたりしています。

6月に郡内のある中学校で給食試食会が開かれました。出席された保護者の方から「給食らしいメニューだった。栄養のパランスなどを参考にしたい」という声が聞かれました。

子どもの未来を支えるのは、今の私たち大人です。今晩は、具のいっぱい入ったおいしい味噌汁を作りませんか。そして、家族で会話が弾むと良いです。